

## 研究結果報告書

### 植民地支配と修学旅行：「奉天教育」を事例として

所属： 瀋陽工業大学 外語学院 日本語学部  
役職： 講師  
氏名： 申福貞

戦前の修学旅行に関して、日本国内から海外への修学旅行についての研究が多く、日本の植民地支配におかれた植民地から日本国内への研究はほとんど見られない。本研究は「満洲」や朝鮮など、いわゆる「外地」と呼ばれた地域から「内地」、つまり日本国内への修学旅行について調査したものである。その事例として、1930年代から40年代にかけて発行された「奉天教育」をとりあげ、日本国内への修学旅行の実体や、「内地」に向けられたまなざし、また、比較研究という視点から戦前における植民地への修学旅行と、植民地から日本国内への修学旅行を比較することより、修学旅行が果たした役割について考察を行った。

「奉天教育」は、1933年3月に刊行され、1940年1月に廃止となった。目次は「行政公報」と「教育研究」にわかれ、修学旅行に関する内容は、「行政公報」の「視察報告」欄に掲載された。日本への視察報告は、ほぼ毎年掲載されていたが、注目されるのは、日中戦争が全面的に勃発した1937年には三回にわたって掲載され、10月号は特集号として組まれていたことである。報告内容は、最初の日程記録、教育概況、名勝記録、風俗記録などの内容から、後の農村教育記録、社会教育、工商教育記録などにいたる。学生の感想文には、軍事大国としての日本や、日本国民の忠誠心と報国精神を高く評価する文章や、また、天皇を賛美する言葉も見られる。日露戦争、「満洲事変」以後の「満洲修学旅行」が、日本の「国威」と「戦勝国民」としての優越感を感じさせるものでもあったとすれば、植民地から日本国内への修学旅行は、戦時下の日本国民の忠誠と日本の「国威」を、植民地支配の人々に体験させることによって、統治者である日本に対する信頼を促していたものであったと考えられる。

また、今回の研究では、「満洲」から朝鮮半島への修学旅行は見られなかった。しかしながら、当時の朝鮮半島において、海外の修学旅行は、「満洲」も一つの海外の修学旅行先となっていたことがわかった。この相違について、さらなる分析を行いたいと考えている。

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

植民地支配と修学旅行」・申福貞・東アジア日本語教育・日本文化研究学会2018年度国際学術大会・2018年8月25日・大連大学  
「“満洲”時代の修学旅行」・申福貞・第一回東アジア日本学研究国際シンポジウム・2018年9月15日・魯東大学・  
「“外地”修学旅行」・申福貞・第二回東アジア日本学研究国際シンポジウム・2019年9月・22日・新羅大学(韓国)

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

「植民地支配と修学旅行」投稿中  
「“満洲”の教育視察と熊本」投稿中

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)